

古書のたのしみ（令和五年二月）

土屋 博

一「賀茂真淵全集第三」贈正四位賀茂真淵翁著

（弘文館、明治三十七年刊、二二二頁より三一四六頁まで）

古書價格三百圓也。賀茂真淵は濱松出身の國學者、歌人。一六九七年生れ、一七六九年歿。荷田春滿の弟子。「萬葉集考」（卷一より卷二十までの字句解説。たとへば「雜歌」とは行幸、王臣の遊宴、旅このほかくさぐさの歌。）、「萬葉集別記」（たとへば、最も古き卷は卷一、卷二とぞ。）、「柿本朝臣人麻呂家集之歌考」を収録す。二段組み、千頁を越ゆる大著の重量は千四百グラム也。

二「劍舞術詩集 全」

（神道館本部、明治四十三年増補三版、非賣品、本文六四頁）

古書價格五百圓也。初版は明治三十九年。神道館創立九周年記念出版物なり。神道館の館長は木崎正道、一八六五年生れ、一九四五年歿。前篇は、源光國「詠日本刀」より頼山陽「下筑後河過菊池正觀公戰處感而有作」まで六十四首、後篇は梁川星巖「芳野懷古」より渡邊逸藏「逸題」まで五十首を収録す。門弟あとがきに曰く、「詩は劍舞術の主にして技術は劍舞術の客たり。詩を解せずして劍舞術の眞髓に至らんとす、豈に得べけんや」と。

三「般若心經講義・佛說法滅盡經講義 全」大内青巒著

（光融館藏版、大正二年十四版、定價貳拾錢、五三十四六頁）

古書價格五百圓也。大内青巒は仙台出身、一八四五年生れ、一九一八年歿。東洋大學學長。般若心經は僅に二百六十二字しか無い經文なれど、説て有る道理は高尚なるもので佛敎の大意を説き盡して有ると申しても宜い由。また、お經は觀世音菩薩が説かれたるものにて、釋迦如來のお説にはあらぬ由。

四「千波萬波」大町桂月・樋口龍峽共編

（松本商會出版部、大正六年八版、定價壹圓貳拾錢、三七八頁）

古書價格五百圓也。初版は明治四十二年。井上哲次郎「宗教以上の道德」（眞の道德は理想を實現して行くのにある）、新渡戸稻造「悲哀中の歡樂」（悲哀は唇に苦くして靈魂の良藥なり）、徳富猪一郎「武徳論」（全國皆兵の主義よりすれば總ての國民皆或る意味に於ては武人たり）、芳賀矢一「浦島傳説について」（萬葉卷九によれば、浦島子歌とて無名氏の謠が載つて居る）、大町桂月「時事我觀」（東京高等商業學校の學生も卒業生も一團となりて其の母校を大學にせむことに盡力奔走到らざる處なかりしが、文部省は之を出し抜いて

東京帝國大學の法科に商科を設くるの令を出せり。) など、當時を代表する智識人の隨筆・論文を集大成したるものなれば、興味盡きず。

五「益軒文鈔 完」光風館編輯所編

(光風館藏版、大正五年訂正再販、大正八年度臨時定價金參拾九錢、一三四頁)

古書價格三百圓也。和綴。初版は大正四年。文部省檢定濟中學校國語科教科書なり。一立志(學問はまづ志を立てるを以て本とす。志とは心の之く所なり。云々)、一三讀書の樂(およその事友を得ざれば爲し得べからず。只讀書の一事は友なくしてひとり樂むべし。一室の内に居て天下四海のうちを見、天地萬物のことわりを知る。數千年の後にありて數千年の前を見る。云々)、一〇〇朝聞道夕死可矣(つくづくと思へば樂おほき此の世なる道を知らざればわれと心をくるしめ天をうらみ人をとがむ。云々)まで、爲になる話題を記す。教科書に相應しき内容と覺ゆ。

六「日本政記・日本外史 論文鈔」賴成一編

(帝國書院、昭和七年刊、定價金三十五錢、三二四七頁)

古書價格二百圓也。例言に曰く、「上古より平安朝末までは之を政記に採り、源平より徳川までは之を外史に採り、國史の大要を通觀せしめんとせり。會ては幕末志士を感憤せしめたる山陽の犀利なる識見と其の明晰雅健なる筆力とによりて暗々裏に尊王愛國の精神涵養に資せんとす。」と。賴成一(二八九一年生れ、一九五一年歿、賴山陽の曾孫。舊制東京高校教授)の篇なれば、文部省檢定濟テキストの中には、類書を圧倒する内容と覺ゆ。

政記目次は神武創業より正統論まで。外史目次は武門武士より徳川氏まで。

七「日本外史鈔」宇野哲人編

(東京開成館、昭和七年刊、定價金五拾錢、本文一三〇頁)

古書價格二百圓也。例言に曰く、「木戸孝允嘗て曰く、維新の鴻業を翼賛せし幾多の國士の功績亦大なり、而も外史二十二卷の功には如かざるなり」と。宇野哲人は熊本出身、一八七五年生れ、一九七四年歿、東京帝大漢學科銀時計卒、東京帝大教授。昭和天皇に進講、浩宮・禮宮の命名に携はる。

八「源氏物語評釋 全」

(櫻園書院藏版、昭和七年刊、定價金四圓貳拾錢、七七五頁)

古書價格五百圓也。本書は萩原廣道(江戸末期の備前出身の歌人、國學者。一八一五年生れ、一八六四年歿)の著なり。西洋思想の影響を受くる以前の古註釋を集大成したるものなり。

九「皇國漢文規範 全」文學博士加藤虎之亮編

(啓成社藏版、昭和十七年刊、定價金五拾錢、四五頁)

古書價格三百圓也。凡例には、「本邦諸儒の作品中より智徳を啓培し節義を磨礪し兼ねて文學趣味を涵養するに足るものを精選せり」とあり。前篇には、序(南洲手抄言志録序など)、記、遊記、論(頼山陽の元寇論など)、説、書表、題跋(中井履軒の楠公訣別圖に題すなど)、碑銘、傳、贊、喩、文。後篇には、貝原益軒の慎思録抄、佐藤一斎の言志四録抄、諸書抄、興風詩抄(芳野懷古三首など)を配す。

十「史紀と日本人」安野光雅・半藤一利・中村愿(すなほ)共著

(平凡社、平成二十三年刊、定價千六百圓十税、三一〇頁)

古書價格二百圓也。半藤一利(一九三〇年生れ、二〇二一年歿)は、昭和二十三年舊制高校一年の夏休みに中島敦「李陵」を初めて讀みたる感動とともに司馬遷を語る。韓信の股くぐり、水甕に落ちたる友達を甕を割つて助けたる司馬光の話、親のため筍を冬に採したる孟宗の話など、昔は教科書にて學ばれてゐたる由。

(令和五年三月二日受附)